
夕日の見える丘の上で

いすぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日の見える丘の上で

【Nコード】

N1174J

【作者名】

いするぎ

【あらすじ】

何処にでもいるような青年。

丘の上で見つけたのは鮮やかな夕焼けと不思議な少女。

1、丘の上

今、僕は丘の頂上を目指して歩いている。
特に理由は無いけど、何と無くそこから見える景色に興味がある。
何か見つきりそうな気がしたんだ。

(案外距離有るな…)

汗を流しながら青年は着々と歩を進める。

歩を進めるなかでふと思う。

(後少しだと思っただが…)

大体1時間程だろうか。

青年は丘に辿り着く。

「やっと着いた…」

青年は眩きながら、目的の景色を眺めに行く。

一歩一歩丘の地を踏み締めて近づく。

眼前に広がる景色。

「これが…」

眺めるのは見事な夕焼け。

照らされる街はまるでミニチュアのようなイメージを与える。

「凄い、こんな景色…今まで知らなかったのか…」

青年は壮大な景色のを眼にし心が高揚する。同時に今まで見過ごしてきたという事実の後悔を覚えてた。

「でも、またこの道を戻るんだよな…」

青年はため息をつく。

いつまでも眺めて居たいという願望を抱くが、現実を見過ごす訳には行かない。

やはり、家路には着かなくてはならない。

「さあ、そろそろ帰ろうかな」

青年は景色を堪能し、帰路に体を向ける。

その時、少し離れた所に何かを眼に捕らえた。

「あれは？」

1、丘の上（後書き）

初投稿です。

よろしければ感想でもくださいw

2、名前

今まで気づか無かったが、青年と同世代と見られる女子が夕日の光を正面に宿し佇んでいる。

「……………」

青年は、体の向きを変えると、動作をまるでネジが切れた人形のように停止させ少女に見入っている。

そんな青年に少女は声を発する。突然。

「貴方は何でここに来たの？」

少女の声が青年のネジを巻く様に、徐々に動きを与える。

「特に…理由は…」

青年は声を振り絞るよに答えるが、そんな短い応答を待つことも無く少女は歩き出している。

「……………ちよ、待ってよっ」

青年は少女に投げかける。

「何？」

今度は少女に言葉が届いたようだ。少し退屈そうに振り向く。

「名前を教えてくださいませんか？」

「私の名前？」

少女は当たり前前の意図を青年に明確化を求める。

青年はさも重大な応答の様に声を発する。

「そう、君の名前を教えてくださいいんだ」

少女は青年のほうへ歩寄り青年の正面に辿りつく。

そして正面で応える。

「私の名前は望絵のえ」

少女は普遍的に答える。

「良い名前だね」

青年はやっと笑顔を表現出来た。

「そうかしら？」

望絵はそう言い終えると
丘を降りて行く。

言い換えれば舞い降りるように

2、名前（後書き）

まだまだ初心者です。

よかったですら、感想お願いしますw

3、日常の非日常

徐々に離れていく望絵を、眼に焼け付けるかのように見入る。

青年の視界には、スポット以外の背景はすべてがフェードアウト状態。

瞳に宿すのは望絵の後ろ姿のみである。

そんな青年の視線を一身に受ける少女は、对象的だ。

何事も無かったかのように歩を進める。

見馴れた道である。

望絵の行くてをさえ切るものは無い。

本の数分だ、青年の視界から去っていく望絵の姿が外れる。

遂に望絵の姿は青年の瞳から放たれた。

途端、青年は座り込む。

形容出来ない疲労が青年を襲う。

（また会いたい…）

そんな率直な思いを抱く。

（確か彼女はいつもここに居るって感じだったな…）

そんなまどろみに浸りながら、青年は家へと向かって歩きだす。

すっかり闇に覆われた道だが、青年の感情を変化させる事は無い。

やがて青年は家へとだどり着く。

3、日常の非日常（後書き）

まだまだ初心者です。

良かったら感想くださいw

4、駆け足

夕方の出来事を思い返す。

すると、今が非常に退屈に感じる。

やがて夜が開け、朝を迎えて学校へ向かい友人と会い、勉強に励む。

通って居る学校は、特に何が有るといふ訳でもない一般的なもの。

生活に不満は無く、極普通の学生である。

それが故にその時間は、丘を駆け上がる事を制約する枷を感じる。

そんな悠久とも思える時間は終業のチャイムと共に終了を迎え。

「また明日」

「ああ、じゃあな」

友人達と短い別れの挨拶を交わす。

外へと向かう足は既に駆け足だ。

青年の心は本より、丘の上へ向かう事だけに傾いている。

そんな衝動だけが指針となり、丘の上へと向かわせる。

(早く、早く…)

もはや、それ以外の事等は眼中には無いという様な程、必至に駆け抜ける。

普段ならとつくに疲れ果て、倒れ込む程の運動量だろう。

それ程青年は過ぎ行く時を煩わしく感じる。

ただただ青年は駆ける。

そして、気付けば目の前には既に丘が見え始めている。

丘が見え始めた事に安心感を感じ歩を緩める。

それでも駆け足には変わらない

しかし、青年は気づいた。

（あつ、こんなに早く来た所でまだ来ていないんじゃないだろうか
…）

4、駆け足（後書き）

最近寒くて布団からでれない毎日…

頑張ろうw

5、再開

非常に単純な事。

単純すぎて、特に気にもとめなかった。

(もう少しゆっくり来ても良かったのかな…)

青年は肩を軽く落とし、少し後悔する。

しかしその推測を、到達する以前の時点で気付いていたとしても、この結果は変わらなかっただろう。

既にそこ来て居るかもしれないという可能性が、全くの零で無い限り。

そして青年は継続する。

すぐそこに見えている頂上に向かって進む事を。

(さて、ゆっくり待つとするかな)

青年は昨日景色を眺めた場所に辿り着く。

どうせいないだろう。

自分のそんな推測から、青年は望絵がこの場にはいないと決め付ける。

しかし青年の推測とは裏腹に、望絵は樹木に自分の体を預け寄り掛かり、静かに佇んでいる。

青年は、思わぬ再開に胸を躍らせる。

再開といっても一方的なもの。

青年の一方的な思いのもとでの再開だ。

しかし、そんな思いを寄せられる望絵本人は、青年などは気にも止めない。

ただただ、夕暮れに染め上がっている町並みを見下ろしている。

その姿からははかない空虚さを感じられるかのようだ。

それでも、青年はそんな空気を知ろうとする事も無く、一心に望絵のもとへ歩を進める。

5、再開（後書き）

今年も紅白みて年越しですW

6、高揚

「久しぶり！」

青年は声をかけるが、この挨拶は、この場には不釣り合いなフレーズだ。

青年が体感して来た時間がどれだけ悠久なものであっても、標準時刻的に最後に会ったのは昨日。

それに気付き、青年は少し戸惑いなが訂正する。

「…じゃないか、ここは普通にこんにちが妥当かな？」

昨日はしどろもどろだった青年の態度は一変して、活気に満ちるはきはきとした態度だ。

それもそのはず、一日といっても青年にとっては、長い長い退屈を越えて再開を迎えたのだから。

感動の再会…、そんな感じだろう。

そんな青年にたいして望絵は

「あら、始めまして」

軽く微笑みさりと応える。

皮肉の積もりで言った言葉だったが、青年にその意図は伝わってい

ない様だ。

「そうだな、まだ自己紹介が終わって無かったな。改めて、はじめまして」

青年はぺこりとお辞儀をして話しを続ける。

「え」と、僕の名前はあゆむ。歩くって漢字一つで歩。よろしく」
微笑みを絶やさずに歩は自己紹介、といっても名前だけが、を伝えた。

望絵は特に興味を示している反応は伺え無い。

まあ、始めから求めてなどはないのだから仕方の無い事だろう。

7、感覚

「そう、で？」

呆れたように望絵が切り返す。

これもまた婉曲的だがストレートな意思の伝達手段だろう。

そんな思いを含ませ、望絵は歩を直視する。

歩も視線を外さずに応える。

しかし、歩は笑顔のまま、まるで望絵の意図は伝わらないらしい。

歩は、躊躇い気味に問い掛ける。

「え〜っと、何しようか？」

望絵の言葉に真面目に答えようとする。

もちろん望絵は、何も求めていない。

「ええ…、そうね…」

歩の雰囲気は望絵は調子を狂わせられる。

なんとなく歩の鈍感さに呆れたらしい。

そんな望絵の調子もいざしらず、青年は同じ雰囲気では話を繋げる。

「良かったら何か学校の話しでもを聞かせてよ」

歩は、単純に望絵の話しを望んで提案する。

そんな普遍的な提案だが、望絵は即座に答える。

「なんでよ、嫌だわ。」

望絵は、率直な返答を首を大きく振って却下する。

どこか深刻そうな面持ちだ。

「あつ、嫌だったらいんだ。ゴメン」

歩は、望絵の思いもよらない反応に戸惑う。

（聞いちゃいけなかったのかな？…）

自分の言動で、望絵の気分を損ねさすものが有ったかを振り返る。

（気をつけなきゃな）

7、感覚（後書き）

感想とか評価とかもらえたらすごいわれしいですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174j/>

夕日の見える丘の上で

2011年1月26日00時35分発行